

組織行動研究

No. 10

編集後記にかえて

●「コミュニティ形成」とは、手もとの辞典（濱島朗ほか編『社会学小辞典』有斐閣、1977年）をみると、「期待概念としてのコミュニティを、住民の、あるいは行政の共有の規範としてどう内実化できるかとの形成過程」と定義してある。そして前後には、コミュニティ・インヴォルブメント、コミュニティ・オーガニゼーション、コミュニティ・ケア、コミュニティ・ディヴェロップメントといった用語が並んでいる。いずれも舌を噛んでしまいそうな用語だ。どうも、コミュニティということばかりして、私たちの軀を流れている「血」になじまないような気もする……。

●それでも私たちは、本モノグラフの表題に「コミュニティ形成」という用語を使用した。現在、各人の住まう地域社会は住民にとって非常に存在実感のうすいものとなっている。しかし一方で、日本という全体社会の動向が、この存在実感の稀薄な地域社会に一層の「責任分担」を迫りつつあるのもまた事実である。そこでは、居住地域を有機化させ、居住民が自主的に問題解決をし得るようなシステムの設計が期待されているのである。このような、地域社会の住民のあいだに有機的な「連帯の動き」が惹き起ってくる状況を、私たちは、一応、「コミュニティ形成」と呼んだのである。

●しかし、この「一応」という便宜主義的態度(?)は、私たちの悪いクセかもしれない。そもそも日本社会における人間結合のありようはいかなる特質を内蔵しているのか、村落と都市のちがいをどう扱えたらよいのか、などなど実は多くの難しい論議が立ちはだかっている。「悪いクセ」と言ったのは、そういう論議を十分にし尽さないままに、すぐ身体を動かしてしまうこと、要するに、理論なき経験主義(atheoretical empiricism)の徒になりがち、ということだ。今回のプロジェクトは、高倉さんの情熱によるところ大であったが、彼女の行動力に引っぱられすぎた感もしないではない……。

●もちろん、いつものように、プロジェクトのメンバーには、コミュニティ社会学者もコミュニティ心理学者も地理学者もと「学際的」な布陣であったが、いまひとつ胸おどるような論議が展開しなかった。各人が各人の「コミュニティ内の仕事」に忙しすぎるのかもしれない。あるいは案外、誰もが、流動する日本都市の実情を本当は把握していないのかもしれない。いずれにしても、今回の武蔵野および三鷹での実査をとおして「身体が感じとったこと」と「資料分析の結果わかったこと」とを十分につき合せてみる必要があると思う。

読者諸氏からのご批判・ご意見を期待する所以である。

(南 隆男)

慶應義塾大学産業研究所社会心理学班研究モノグラフ

組織行動研究 (第10号)

責任編集 佐野勝男・南 隆男

KEIO STUDIES ON  
ORGANIZATIONAL BEHAVIOR AND  
HUMAN PERFORMANCE No. 10  
MARCH 1983

〒108 東京都港区三田2-15-45  
発行 慶應義塾大学産業研究所  
電話 (453) - 5640 (直通)  
〈昭和58年3月31日〉

〒104 東京都中央区八丁堀3-21-4  
印刷 株式会社 国際印刷  
電話 (551) - 3930 (代表)  
〈昭和58年3月23日〉